



農業ジャーナリスト

青山 浩子

経済
観測

2014.11.19

経営者として農業を営み、収益を着実にあげている農家は、例外なく数字に強い。計算が速くコスト意識も強い。自分や周りでやろうとしている事業がうまくいくかどうかを瞬時に判断する嗅覚も持っている。そうした農家を香川県の税理士、泉保繁美さんは「体系立てて学んだ経験がないかもしれないが、体感的に数字に強い農家」という。若手の中からもそうした農家が台頭してきたという。

体感的に数字に強い農家が理論武装をすればさらに経営能力は上がる。そのためツールができあがった。農業簿記検定だ。農業特有の簿記を熟知した人がチャレンジする。2014年に行われた2回の試験では約1300人近くが受験、約7割が合格した。農業者と関わりが深い税理士や会計士で構成す

る全国農業経営コンサルタント協会が監修している。事務局によると「農家より、税理士や会計士、銀行員が多く受験したようだ」という。実はこれまで農業の会計に関する全国統一の基準がなかった。たとえば、まだ木についている未収穫の果物などをどう棚卸し評価するのか、各種補助金は損益計算書にどう計上するのかなど、地域や税理士によっても扱いがまちまちだった。そこで協会が「農業の会計に関する指針」を14年に制定し、農業簿記検定の実施へとつながった。

感覚的にも理論的にも数字に強い農家とは、農林水産省が育成に力を入れている「効率的で安定的な農業経営」につづっている経営体」とも重なる。絶好のツールができあがったので活用していきたい。農業簿記検定の合格者から経営指導を受ける農家をいかに増やすか、皮膚感覚で数字に強い農家のなかで合格者をどこまで増やせるか。これが足腰の強い農業につながるに違いない。